

## 18世紀インド・オリッサ地域社会における職分権体制 —— 王権、市場、宗教との関連におけるその近世的性格 ——

田 辺 明 生

### はじめに —— 近世インド社会への視角 ——

本論では、オリッサのクルダー王国（1570年頃-1804年）<sup>1)</sup> およびその軍事的・行政的拠点のひとつであったマントリ城塞における「職分権体制」をとりあげ、その近世的性格について論じたい。職分権とは、国家および地域の再生産に必要な職分を果たす諸世帯が、その職分に応じて地域共同体の生産物から取り分等を受け取る世襲的な権利のことをさす。職分権体制とは、分業関係と資源分配のあり方を、諸世帯への職分権の割り当てを通じて規定する社会制度のことである。それは地域共同体における義務権利関係を一義的に定義するだけでなく、生活世界における人々の日常的行為を社会・政治・宗教的に意味づけをなし、人々の社会的人格（パーソンフッド）およびアイデンティティを基礎づけるものであった。

これまでインド社会における職分権体制の存在については、小谷汪之 [1989, 2007] や水島司 [1990, 2008] らの研究によるデカン地方のワタン体制やタミル地方のミーラース体制が知られてきた<sup>2)</sup>。また筆者も、前植民地期オリッサにおける職分権体制について一次史料からその詳細を描いてきた [田辺 1997; Tanabe 1999, 2005]。ここでは、これまでの研究に立脚して、近世オリッサの職分権体制が、当地方独自の王権・市場・宗教のあり方といかに関連していたかを検討したい。

---

1) クルダー王国については、ヘルマン・クルケが優れた研究を手掛けている [Kulke 1974, 1978b]。

2) ワタン体制やミーラース体制は、本論でいう職分権体制と同義である。なお小谷・水島・三田 [2007] は、同制度を「世襲的家職家産体制」と名づけている。この名称を使用することも考えたが、「家産」という言葉は世帯の所有財産を指すものであり、「職分権」が地域共同体の生産物に対する一定割合の取り分や儀礼的特権などを含むことを十分に表現できないと考え、採用しなかった。なお職分権は世襲的に相続・継承されるので、「世襲的職分権体制」と呼ぶことも可能である。なお筆者は、以前の論考では同システムを「職位分業分配体制」と名付けたこともあったが [田辺 1997]、「職位」という言葉が一元的なヒエラルヒーを含意し適当ではないことと名称として長すぎることから、「職分権体制」と呼ぶこととした。「職分権体制」にとっても「分業と分配」が中心的なメカニズムであることに変わりはない。

旧来の研究において前植民地期インド社会は、閉鎖的で固定的な村落共同体とカーストによって特徴づけられると考えられていた<sup>3)</sup>。しかし1980年代頃より、18世紀のインド史像を再検討しようとする動向が欧米の研究者を中心に生まれてきた。後に「再検討派」(revisionist)と呼ばれることになるC. A. ベイリーやD. A. ウォッシュブルクらは、前植民地期から19世紀半ば頃までの南アジアにあっては、断絶ではなくむしろ連続的な政治経済的発展があったことに着目した。彼らの業績によって18世紀インドにおける交易と商業の発展や社会的動態の活性化、あるいは政治・軍事的な技術制度の向上などが明らかにされ、この時代における「近世」(early modern)的な性格が注目されるようになった[Bayly 1983, 1988; Kolff 1990; Perlin 1985b, 1993, 1994; Stein 1985, 1989; Washbrook 1981, 1988, 1990; Wink 1986; 中里 1999; 小谷編 2007]。これらの研究により、静態的で固定的な村落共同体やカーストという従来の伝統的インド社会のイメージは、もはや時代遅れのものになったといえよう。

ただし再検討派の研究は市場経済や行政の発展に注目するあまり、前植民地期インドにおける固有の社会体制に十分な光を当てていないという難点があるように思われる<sup>4)</sup>。この点を踏まえ本論では、前植民地期インドの地域共同体における職分権体制に注目し、近世インド社会の姿をより全体的にとらえようと試みている。ただしここで前植民地期インドの地域共同体について論ずるからといって、新伝統主義的な傾向性があるA. ナンディアやラマチャンドラ・グハラのように[Nandy 1983; Gadgil & Guha 1992]、資本主義や近代国家に対置される「伝統的な共同体」を実体化し称揚するつもりはない。地域共同体およびそこの社会体制は、自律的で調和的な共同体として存在していたのでは決してなかった。たしかに市場経済や行政制度から区別される社会体制の位相はあったと考えるが、そうした地域共同体における職分権体制を市場経済や国家政治との相互作用のなかでとらえることが必要である。前植民地期インドの社会体制のあり方を明らかにしたうえで、それが市場や行政の近世的発展といかに関わっていたかを説明することによって初めて、伝統インドの共同体を実体化するのでも、資本主義の発展にインド史を還元するのでもなく、インド固有の初期近代(early modernity)の発展径路を論ずることが可能になるであろう。

では、クルダー王国の地域共同体における職分権体制は、近世オリッサにおける国家形成および市場経済の発展の過程といかに関わっていたのであろうか。

17-18世紀は、クルダー王国が査察と統御の権力を地域社会の内部にまで及ぼしていった時期であり、国家形成の過程において地域社会の性格は不可逆的に変化した。その結果フロンティアへの大規模な移住が起り、新しい行政技術が導入され、貝貨(子安貝の一種で

3) インド村落観の形成と変容については、応地 1977 が詳しい。

4) ただしパーリンは例外である [Perlin 1985b]。

ある *Cypraea moneta* を貨幣として用いたもの。オリヤ語では *kauri*、英語では *cowrie* あるいは *cowry*) を基盤とした会計と記録のシステムが用いられるようになった。これらの変化により貨幣経済の進展が一層進み、地域社会はインド洋交易を含む、近世的な経済ネットワークへと取り込まれることになった [Tanabe 1999, 2006]。つまりこの時代に国家と市場と社会の関係は近世的展開を遂げたのである。

さらに近世クルダー王国における地域共同体と王権・国家との相互関係を理解するためには、近世オリッサの王権イデオロギーについて考察し、地域共同体が国家の軍事・行政機構に組み込まれた文化的なメカニズムを視野に入れる必要がある。また18世紀におけるパトリオティズムおよびバクティ（信愛主義）思想について検討し、それらが地域共同体の職分権体制のなかで生きる人々を、いかにして神聖王への忠誠そして国家神への奉仕へと導いたかについても論じていきたい。

18世紀のインド社会を理解するためには、交易・商業の発展や行政・軍事の近世的展開に注目するのみではなく、生活世界を律した社会制度そして価値や意味という宗教文化的側面についても十分注意を向けなくてはならないのである [Chatterjee 1996: 7]。そのような全体的なアプローチこそが、前植民地期のインド社会のあり方の十全な理解につながり、植民地化の影響についての正当な評価も可能となる。本論はこうした方向性において、18世紀インド研究に貢献することを目指している。

## I クルダー王国とマントリ城塞

17世紀から18世紀の近世オリッサにおいては、王国と地域共同体の相互関係が大きく変容した。この時代には、国家権力の地域社会への浸透と同時に、全ての富と繁栄の源としての神聖王という王権イデオロギーが確立したのであった。そこにおいて、地域社会の職分権体制は社会的再生産の基盤であり続けると同時に、近世国家の軍事・行政的な支配装置に組み込まれた。これは供犠祭主としての王と供犠組織としての地域共同体が、政治神学的・宗教思想的イデオロギーによって結びつく過程でもあった。

この時代において、王への権威が集中するにつれて職分権体制の正当性および権威の源泉に重要な変化が生じたことに注目する必要がある。17世紀から18世紀のあいだに、国家による統御と査察の統治<sup>ガバメントリチ</sup>性が地域社会に徐々に浸透してきた。それと同時に王は、ひとつひとつの役職や職分の付与者としての権威を有するようになった。王は、国家官僚による各職分権の査察と記録を通じて職分権の個別の詳細を把握するだけでなく、供犠組織たる職分権体制における供犠祭主としての政治・儀礼的な権威を確立したのである。またそのことを通し、全ての職分権の中心的な源泉としても位置づけられるようになった。地域社会で採集された口頭伝承的な家族史においては、自分たちの家族がいかにして王から職分や役職を与えられたかについてしばしば語られる。

職分権に付随する取り分として配分される土地には、全てももとの職分権者あるいは職分の内容に関わる名前がつけられている。たとえば「壺屋の職分地」(*Kumbāra hetā*)、「村長の職分地」(*Pradhāna hetā*)、「ラーマチャンディー(女神)への供え物のために与えられた土地」(*Rāmachaṇḍīnka bhoga khañjā jami*)などである。持ち主がどのようにしてその土地を得たのかについて示唆する名前を持つ土地もある。たとえば、プジャリ・バラモン(*pujāri brāhmaṇa* 寺院司祭)の家族が所有する「米汁の流れ(*torāṇiā nāla*)」という名前の土地がある。私がプジャリ・バラモンにその名前の由来を訊いたところ、次のような話をしてくれた。

あるとき、ムガルに攻撃されたクルダー王がマニトリ城塞に逃げてきた<sup>5)</sup>。王は、朝から何も食べておらず、寺院司祭の私の祖先に何か食べる物をくれるようにいった。祖先は、そのときちょうどトリティーヤ・デーヴァ(*Tṛtīya Deva*, ジャガンナータの別称)にポカロ(*pakhāla* 水につけた飯)を捧げたばかりだった。祖先は、王にそのポカロのお下がりをすすめた。王はポカロを満腹になるまで食べ、最後のトラニ(*torāṇi* 米汁)まで全部飲み干し満足した。そこで王は、祖先に「米汁の流れ *torāṇiā nāla*」という土地を与えた。それは祖先がトリティーヤ・デーヴァに奉仕する代わりに与えられる職分地の一部になった。

ポカロは、飯を水につけておいたものであり、トラニは、そのポカロの汁である。ポカロは、オリッサの庶民の典型的な日常食で、ジャガンナータ神にも捧げられる。村人たちは、ポカロを食べた後、トラニをぐっと飲むと腹がくちで満足するのだと、よくいう。「米汁の流れ」という土地の名前は、こうした文化的背景を考え合わせるとき、なかなかユーモラスである。いずれにせよ重要なのは、このように全ての職分権と職分地の与え手が王であるとされたことである。ここに職分権体制は、単に地域共同体の社会制度ではなく、王を中心とする支配体制のなかに少なくともイデオロギー上は組み入れられたのである。

クルダー王国の成立前には政治・儀礼的に自律性を有していた首長国や首長領が、国家権力の地域社会への浸透にともない城塞郷として王国に包摂される過程で、そのイデオロギー

5) この伝説は、ある程度歴史的な事実に基づいているようである。1617年、クルダー王のプルショットモ・デボは、ムガルの新しいオリッサ地方長官のムカラム・カーンに攻撃され、家族とともに、「ランブルの領土に近い」マニトリ城塞に逃げ、それを「(暫定的な)首都とした」という[Mahapatra 1969: 61]。また、プルショットモ・デボ王は、ムガルのブリー寺院への攻撃を恐れ、1619年から1620年のあいだ、ジャガンナータ神をマニトリ城塞に隠した。1621年、王はムガルの地方長官のアフメッド・ベグ・カーンに敗北し、再びマニトリ城塞に逃げ、1621年に亡くなるまでそこに滞在した[Mahapatra 1969: 62; Pattanaik 1979: 32]。次のクルダー王、ノロシホ・デボは、ジャガンナータ神の聖なる本質であるとされ、神体のなかに収められている「ブラフマ」(梵)をひそかにマニトリ城塞に移し、それを隠して祀るために、村にジャガンナータ寺院を建設した[Mahapatra 1969: 65]。王は、さらに村に王宮を建設し[Tripati & Kulke 1987: 103]、ジャガンナータ寺院は王宮の門の前に建てられた。現在でも、ジャガンナータは、ゴロ・マニトリ村で、トリティーヤ・デーヴァという名で祀られている。

的な自律性を失ったことは重要である。地域共同体の職分権体制は、その象徴的な中心として王の存在を必要とするようになった。王は、地域共同体において物理的には不在であったが、職分権の源泉としてまた供犠的共同体の供犠祭主として、政治・儀礼的な権威と権力を確立していった。王はその権威と権力をもって、地方に分散して存在していた軍事・行政機構をも束ねたのだった。

ただし近世クルダー王国における王権支配の地域社会へのこうした浸透は、中央からの軍隊や官僚の派遣あるいは命令系統の一元化というような近代国家的な意味での中央集権化を意味したのではなかった。城塞郷の首長、書記、会計、歩兵などは、たしかに王国の軍隊そして官僚の一部として城塞に配置されていたわけだが、彼らの主なる収入源は、地域共同体の職分権体制において分配される取り分であった。国家から直接俸給を受け取る職分者もなかにはいたが、その俸給も実際には居住する地域共同体の生産物からの配当であった。城塞における軍事・行政・司法の機能は、国家機構の一端をなしていたのであったが、それはあくまで地域共同体の職分権体制のなかで運営されるものであった。

つまり地域社会に居住し、国家の軍事行政機能を果たす戦士や書記や会計に対しては、王が正当化した職分権体制を通じて、職分についての権利と権能を保証したのであった。少なくともクルダー王国においては、近世国家の軍事・行政の大半を司る職分権体制の基盤はあくまで城塞郷にとどまっていた。王権は、城塞郷に分散する軍事・行政機構を束ねるために、その査察の権力と儀礼的権威を高めたのであるが、同時に軍事・行政に関する資源の再生産と提供については地域共同体に依存した。つまり近世王国の国家権力が地域社会へと浸透していく過程は、逆説的に、国家の機能と権威が分与されていく権力の遠心化の過程でもあった。このような意味で、パーリンがいうように王国の「集権化は明白な分権的性格を有していた」のである [Perlin 1985a: 475]。

こうした事態につき、王は儀礼的権威を、そして地域は実際の権力を持つという「分節国家」[Stein 1980]の形で理解する研究もある。しかしそれは、地域社会における軍事や行政が国家の再生産に大きく寄与していたという事実を軽視している点で、適切とはいえない。地域社会は、王にその権威・権力の正当性について依存しながら、他方、有事には国家のために軍隊を派遣し、王のために税徴収や会計などの行政的サービスを提供し、さらに土地や税の提供という形で王家や大臣を経済的に支えた。つまり地域社会は、儀礼的関係のみならず軍事や行政・経済のレベルにおいても、王国との深い相互依存関係を有していたのである。

近世クルダー王国は、イデオロギーのレベルでは王が供犠祭主として確立され、地域共同体は王の存在なくしては供犠組織として機能できなくなった。その一方、国家機構の再生産と運用レベルにおいては、王権は地域共同体の供犠的奉仕に依存していた。しかし同時に王は、供犠祭主としての権威において、城塞郷における軍事行政的な資源を実際に統御し、また国家維持のために使用する権力をも有していたのであった。本論ではこのような国家と地域共同体の全体的な相互依存関係を「供犠祭主国家と供犠組織共同体」と呼ぶことにする

[Tanabe 2003]<sup>6)</sup>。

## II 国家, 市場, 地域共同体

地域共同体における資源の分配は、職分権体制を基盤とした社会政治関係を構築していた。さらに国家税の徴収と支出のあり方、そして王からの贈与の数々は、王権を中心とする名誉と特権の体制を形成するものであった。その詳細は既に別稿で論じたので [田辺 1997; Tanabe 1999, 2005], ここでは、それぞれの職分権者が村落、城塞郷、国家から与えられる取り分や俸給や手当、そして徴収される税についてまとめた表のみを載せておこう (表 1, 2 参照)。そこでは、地域社会での生活に必要なとされる壺屋や洗濯屋や床屋などとならんで、歩兵や会計などの国家の軍事行政にたずさわる者たちが職分権を与えられていた。

地域の職分権者たちは、王から与えられた職分権、俸給、手当、贈物を通じて王権のなかに包摂された。それはまた王の権力・権威が地域社会へと浸透し、個々の臣民と王との一対一の関係が構築される過程でもあった。王は城塞郷における職分権体制を正当化し、それを王国の行政・軍事ネットワークのなかへと組み込んだのである。城塞郷は国家運営のために必要不可欠であり、また反対に地域共同体は供儀組織たる職分権体制の供儀祭主かつ正当性の源泉として、王を必要としたのであった。ここにおいて「供儀祭主国家と供儀組織共同体」の補完的關係が成立していたのである。

しかしクルダー王国において、17-18 世紀における国家権力の地域への浸透が、国家収入の増大を意味しなかったことは重要である。国家税は、マントリ城塞郷の全資源のうち

表 1 マントリ城塞地域の職分権資源の配分 (1776-1777 年)

	土地		貨幣分	合計	%
	貨幣価値	面積			
神々	991. 9. 7. 2	(6. 9. 4. 7)	83. 10. 14. 2	1075. 3. 5. 2	8.12%
バラモン	107. 0. 0. 0	(0. 7. 0. 0)	0	107. 0. 0. 0	0.82%
村レベル役職者	499. 15. 12. 0	(5. 1. 19. 15)	6. 18. 0. 0	506. 4. 10. 0	3.86%
城塞レベルの奉仕者	216. 0. 0. 0	(1. 0. 12. 1)	0	216. 0. 0. 0	1.65%
軍人	9080. 6. 10. 2	(65. 7. 3. 9)	1746. 14. 12. 2	10920. 4. 0. 0	83.25%
国家の直接取り分	117. 12. 15. 0	(1. 10. 14. 2)	176. 6. 0. 0	294. 2. 15. 0	2.24%
合計	11103. 5. 0. 0	(80. 4. 20. 14)	2014. 1. 7. 0	13117. 12. 0. 0	100.00%

出典：バロバティ村で収集した貝葉文書

注：数字は貝貨単位で示してある。たとえば、991.9.7.2は、991カハノ1ポノ7ゴンダ2コダ、と読む。1カハノ (*kāhāna*) = 16ポノ (*paṇa*) = 320ゴンダ (*gaṇḍā*) = 1280コダ (*kaḍā*) = 1280の子安貝 *kauri*。一カハノは、十八世紀オリッサにおいて約四分の一ルピー。括弧の中の数字は、面積を表す。たとえば、23.3.16.15は23バティ3マノ16グント15ビスワである。1バティ (*bāṭi*) = 20マノ (*māṇa*) = 約9エーカー。1マノ = 25グント (*gaṇṭha*) = 約19,600平方フィート = 約0.45エーカー。1グント = 16ビスワ (*biśwā*) = 約784平方フィート。1ビスワ = 4カニ (*kāni*) = 約49平方フィート。一マノの値は、一八二三年の測量査定において初めて標準化されたのであり、それ以前のクルダー地方においてそれがどのくらいの値だったのかを正確に知ることは難しい。

6) 供儀祭主としての王と、供儀組織としての地域共同体の關係は、当地域の祭祀において、儀礼的に表象・確認される [田辺 1993; Tanabe 2003]。

表2 マントリ城塞地域における職分別の取り分と税金一人当たり平均 (1776-1777 年)

職分	数	村からの 手当 (a)	城塞地域 からの取り分	税金と税率	税引き後の 取り分 (b)	国からの 給与 (c)	総取り分 (a)+(b)+(c)
首長	1	0	458. 2. 0	13. 15. 0 (2.88%)	444. 7. 00	100. 0. 0. 0	544. 7. 0
国家レベルの軍人	2	0	305. 0. 0	21. 5. 0 (6.99%)	283. 11. 00	0	283. 11. 0
特権兵士	2	0	226. 13. 0	11. 11. 0 (5.15%)	215. 2. 00	0	215. 2. 0
国家書記	1	0	77. 5. 0	8. 14. 12 (11.53%)	68. 6. 80	65. 8. 0. 0	133. 14. 8
国家床屋	1	0	107. 6. 0	8. 6. 4 (7.81%)	98. 15. 16	0	98. 15. 16
歩兵	85	0	101. 0. 2	10. 10. 11 (10.55%)	90. 5. 11	0	90. 5. 11
神々(供物)	12	0	84. 14. 9	5. 13. 16 (6.9%)	79. 0. 13	0	79. 0. 13
村会計	1	$\alpha$	99. 4. 0	25. 11. 0 (25.78%)	73. 9. 00	0	73. 9+ $\alpha$
在地書記	1	0	0	0	0	72. 0. 0. 0	72. 0. 0
会計役(城塞レベル)	1	0	0	0	0	65. 10. 0. 0	65. 10. 0
貢納金集金役	1	0	60. 10. 0	4. 11. 5 (3.91%)	55. 14. 15	0	55. 14. 15
寝床整え役	2	0	40. 0. 0	2. 15. 5 (7.38%)	37. 0. 15	0	37. 0. 15
大工(城塞レベル)	1	0	33. 8. 0	2. 7. 11 (7.38%)	31. 0. 9	0	31. 0. 9
村長頭	1	$\alpha$	42. 10. 0	14. 11. 0 (34.38%)	27. 15. 0	0	27. 15+ $\alpha$
軍楽隊員	9	0	28. 10. 9	1. 2. 7 (3.91%)	27. 8. 2	0	27. 8. 2
床屋(城塞レベル)	1	0	28. 0. 0	2. 1. 2 (7.38%)	25. 14. 18	0	25. 14. 18
村長	8	4. 5. 7. 0	37. 0. 19	16. 8. 9 (44.60%)	20. 8. 10	0	24. 13. 17
壺屋(城塞レベル)	1	0	25. 0. 0	1. 13. 10 (7.38%)	23. 2. 10	0	23. 2. 10
バラモン(布施地)	5	0	21. 6. 8	2. 12. 16 (13.21%)	18. 9. 12	0	18. 9. 12
参加書記	1	0	0	0	0	16. 14. 0. 0	16. 14. 0
徴税官	1	$\alpha$	26. 7. 0	9. 0. 10 (34.38%)	16. 6. 10	0	16. 6. 10+ $\alpha$
労務者	21	0	15. 5. 11	0	15. 5. 11	0	15. 5. 11
神々(奉仕者給料)	2	0	23. 8. 0	10. 2. 0 (42.97%)	13. 6. 0	0	13. 6. 0
見張り人	1	0	11. 0. 0	0. 3. 0 (7.38%)	10. 3. 0	0	10. 3. 0
床屋(村落レベル)	2	0	9. 6. 0	2. 14. 18 (31.25%)	6. 7. 2	0	6. 7. 2
洗濯屋(村落レベル)	2	0	7. 14. 16	2. 7. 9 (31.25%)	5. 7. 7	0	5. 7. 7
大工(村落レベル)	1	0	6. 10. 8	2. 1. 5 (31.25%)	4. 9. 3	0	4. 9. 3

出典：パロバティ村で収集した貝葉文書

注：数字は貝貨単位で示してある(表1注参照)。ただし末端のコダ数は省略している。

表3 マントリ城塞地域からの国家収入 (1776-1777 年)

国家の直接取り分	職分権保有者 からの所得税	その他、城塞地域 からの諸税	マントリ城塞地域 からの国家収入 (総額)	マントリ城塞地域 の総生産額
264. 11. 11. 0	1302. 14. 0. 0	375. 4. 12. 2. 0	1942. 15. 6. 3	13117. 12. 0. 0
13.62%	65.53%	19.32%	100%	
(2.08%)	(9.70%)	(2.86%)	(14.81%)	(100%)

出典：パロバティ村で収集した貝葉文書

注：数字は貝貨単位で示してある。なお合計額は計算に合わない。元の文書における記述上のあるいは計算上の間違いによるものと思われる。

14.81%にしか及ばなかった(表3参照)。さらに国家税の三分の一は、地域共同体における儀礼や、役職者への贈与に用いられたのであった。結局、地域共同体からの実質的な国家収入は、当城塞郷の総生産額の10%にも満たないものであった。

近年の研究においては18世紀のインド諸王国では市場経済の隆盛とあいまって国家収入が増え、国家が直接に雇用する常備軍が重要になってきていたことがしばしば強調される[Bayly 1983: 14-5; Peabody 2003: 80-111]。しかしゴードンが指摘するように、規律

化された歩兵隊・砲兵隊を一元的な命令体系で動かす西洋式の新しい軍事システムについては、その導入が戦略上の意味を持つほどの大規模軍隊を必要とし、同時にそれを維持するだけの収入が見込める大王国のみが採用したのだった。本書のクルダー王国のような小規模の王国においては、職分権体制を基盤とする軍事システムが植民地化にいたるその時まで維持された [Gordon 2002: 174]。

クルダー王国においても、貨幣経済の進展と商業資本の発達により、国家が現金による収入を増やしていたことは確かである。国家は、地域社会における米や綿布・魚・油などの売買に関わる商業活動に対して税金をかけ、それを「貨幣分」として得ていた。また英国の報告書においてもクルダー王国の国庫は「領土を通る穀物・塩・その他あらゆる商品に対してかけられる通商税 (*sayer*)」によって潤っていたという<sup>7)</sup>。

しかしクルダー王国ではそれらの収入を基に新式の軍隊をそろえたわけではないようだ。むしろ軍事力については、18世紀においても引き続き乾燥丘陵地の城塞のネットワークに依存していた。近世クルダー王国では、直接的に兵士を雇用し新式の軍隊をそろえるのではなく、むしろ城塞に配備されていた戦士たちに対して、国家による査察と統御を及ぼすようにしたのであった。城塞の「農民戦士」たちは、必要に応じて駆り出される「武装農民」ではなく、国家の兵士として契約書式においてははっきりと義務と権利が定義された職分権を王から付与されていた [Kolf 1990]<sup>8)</sup>。そしてさらに主要な役職者たちには、王からタイトル・給与・減税特権・儀礼的特権・物品などの贈与を通じて、王を中心とする名誉と特権の体系に位置づけられたのであった。つまり、クルダー王国の軍事システムに近世的性格があるとすれば、それは、規律化された軍隊を一元的な命令体系のもとに置くことにあったのではなく、城塞郷における個別の戦士と王の関係を贈与契約的に樹立し、その義務と権利を分類・数量化し、記録によって明確化したことにあった。そしてさらに王を名誉や特権、さらには職分権などのあらゆる政治・経済・儀礼的な資源の源として位置づけて、個々の兵士を、その王を中心とする贈与と返礼の体系のなかに取り込んだことにあるといえるだろう。これによって戦士たちは、各城塞郷に配備されながらも、王国の軍隊として動員され得たのだ。近世クルダー王国においては、地域社会の職分権体制を国家装置に取り込むことに成功したが、一方で行政・軍事などの国家機能については職分権体制に依存していたことも事実であった<sup>9)</sup>。

ただしこのことは、国家および地域共同体の働きが市場経済の進展と無縁であったことを

7) From W. Ewer to W.B. Bayley, Calcutta, 13th May 1818, paragraph 173, in *Selections from the Correspondence on the Settlement of Khoorda Estate in the District of Pooree* Vol. I, p. 59.

8) 「農民戦士」(peasant soldiers) と「武装農民」(armed peasants) の違いについては Alavi 1995 を参照のこと。

9) 小谷が指摘するように、小王国と大王国の違いをここでは考慮に入れなければならない。マラー

意味するわけではない。17-18世紀のクルダー王国において、国家の査察権力そして行政技術の地域社会への浸透により、個々の職分権は数量化され記録をとまうこととなった。これは、地域の資源が貝貨の単位に換算され、市場で交換可能な価値を付与されたことを意味していた。ただし国家が貝貨で税を支払うことを強制したために貝貨が地域社会に広がったのではなく、むしろ地域の商品経済において貝貨が既に流通の媒体としての機能を果たしていたところ、国家はさらに、商品経済の外の領域にあたる地域社会の職分権体制においても、貨幣による価値の数量化の論理を導入したのだといえるであろう。これによって地域社会の職分権体制は、少なくとも概念上、貨幣経済とも親和的なものとなったのである。

地域社会の職分権体制と商品経済を実際に媒介する役割を果たしたのはチャンドナ（よそ者）と呼ばれ、米や綿布、油、魚、塩などの商品生産と流通に携わった油屋、菓子屋、牛飼、漁師（チュラと呼ばれる米の加工品も生産販売していた）、織工、綿梳き人などの商工民であった。彼らは、地域社会の生産物を商品として市場で流通させた一方、居住地と耕作地の高い借料を支払うことで地域共同体に対しては貨幣収入をもたらしていたのであった。一方、農民たちは、焼畑で作った棉花や家内で紡いだ綿糸や余剰穀物を売ることによって現金収入を得ることができた。そうした取引の場となったのは、地域のいたるところに開かれた定期市（*hāṭa*）であった。こうした市場においては、農民と商人のあいだで取引が活発に行われ、穀物・油・スパイス・サリー・タオルなどの商品が盛んに売買された。クルダー地方の製品のうち交易にとって重要であったものは、綿布と米それにチリカ湖の塩であった。綿布は今日でもクルダーの特産品である。クルダー地方は、棉花の産地であり、平野部や港からもそれほど遠距離ではなく、綿布の生産に好都合であった。たとえばゴロ・マニトリ村においては、1828-1830年において村の全面積（荒蕪地・森林を除く）の645.91エーカーのうち、128.83エーカーを綿畑が占めていた。綿畑で生産された棉花は、綿すき職人（*Tuḷabhīnā*）に渡され生綿にされたのち綿糸に加工された。ここまでの過程には、多くの女性を含む家内労働が関わっていた。綿糸は、織工（*Tanti*）が引き取り、綿布に仕立てられた<sup>10)</sup>。

ただし貨幣経済が浸透し、商品市場の重要性が高まっていたからといって、地域共同体の職分権体制が崩壊に向かっていたわけではない。「カーストを基礎とする社会関係」と「貨幣と市場」は折り合わないもののように考えられることがしばしばあるが [Stein 1989: 10],

↓  
 タのような大王国においては、国家レベルにおける歳入の増大と常備軍の重要性は、クルダー王国のような（少なくともその規模においては）小さな王国に比べてはるかに大きかったであろう [Kotani 2004]。国家と地域社会の相互依存関係も大王国のほうが少なかったと想像される。ただし大王国のなかに存在したはずのより小規模の政体の性格や役割について、また、国家および地域社会との関係がいかなるものであったのかについては、より周到的な検討が必要である。

10) ホサインはベンガルでの綿布「生産の職業構造」について、その過程に多くの種類の仕事に従事する人々（職工、洗濯屋、アイロンかけ屋など）がいることを示している [Hossain 1979: 342]。オリッサでも同様の過程があったことが想像される。

少なくともクルダー王国においては、地域共同体と市場は、両立性があるだけでなく相互補完的でもあった。前植民地期インドの国家と商業および国家と地域共同体の関係については、これまで多くの研究がなされてきている [e.g. Bayly 1983; Dirks 1987; Karashima 1984, 1992, 2002; Kulke 1995; Peabody 2003; Stein 1980; Subrahmanyam 1990, 2001]。しかし地域共同体と商業の相互関係については、十分な研究がなされているとは未だいい難い。メノンが指摘するとおり、これには次のような研究上の背景がある。「都市と村落の経済を対立的にとらえ、商業と市場は農民社会から自律していると考えられる傾向がある。村落の領域は、モラル的な再分配経済にあるとみられている」[Menon 2000]。しかしメノンは、前植民地期のマラバル（現ケララ州）について「ここにみられるのは、経済の不安定な性格から、市場経済によって得られる独立性とジャジマーニー的なパトロン制とが、同時に存在する状況である」と指摘する [Menon 2000]。ここには、地域共同体と市場を対立的ではなく相互補完的にとらえる、より全体的な視点がみられる。ただしメノンが描写するジャジマーニーの関係は、前植民地期オリッサにみられた職分権体制とは大きく異なるものである。彼の描写するジャジマーニー関係とは、職分権体制がすでに崩壊し、個々の世帯が交換関係を結ぶようになった状況を示しているのかもしれないし、あるいは、前植民地期の社会構造の地域的な違いを表しているのかもしれない。いずれにせよ、18世紀のクルダーまたマラバルにおいては、地域共同体の再分配的な経済は、市場経済および商業の発達と両立していた。ローカルな規模の経済と、より広範囲の交易や市場交換とは重層的にまた連携的に成立しうる。このことは、現在のグローバル経済とローカル経済の関係を考えるうえでも重要である。地域共同体と市場経済の関係について、地域比較を含んだ一層注意深い研究が望まれる。

さて、近世オリッサにおけるこうした商品経済の隆盛を支えていたのが、貝貨であった<sup>11)</sup>。17-18世紀において、英国人商人はインド洋のモルディヴ諸島から大量の子安貝を購入し、東インドでは綿布貿易に、また西アフリカでは奴隷貿易に、貝貨として使用していた [Heimann 1980, Perlin 1987]。17-18世紀におけるベンガルでは、織工たちは貝貨で前金を受け取っていた [Perlin 1986: 1045; 1987: 300, 320]<sup>12)</sup>。貝貨が広く流通していたオリッサにおいても同様であったと考えられる [De 1952a, b]<sup>13)</sup>。つまり貝貨は、貿易商や金

11) 貝貨についての諸文献は Perlin 1987 に詳しい。

12) ホサインによると、織工は、前金をルピーで受け取ったが、市で買い物をするために、それを貝貨に交換したという [Hossain 1979: 340-341]。

13) パーリンによると「ベンガルの商人は、早くも16世紀から生産地であるモルディヴ諸島で、米および綿布と交換することにより貝貨を輸入していた」。そして「17世紀には……貝貨はインド亜大陸でひろく用いられていた。(しかし)18世紀半ばまでには、それが使われていたほとんどの地域で銅銭が貝貨を駆逐するようになっていた。……例外は東インドであった。ベンガルやビハールの後背地の一部そしてオリッサにおいては、19世紀初頭にいたるまで、それまでより多くの量を呑みこんでいった」[Perlin 1987: 241]。

貸しから織工および綿梳き人へと流れ、焼畑で綿花を栽培していた農民達や、家内で綿花を梳いたり紡いだりといった作業に従事した女性達へと流通した。こうした副収入は農村に住む人々——特に貧困層や女性——にとって重要な経済的意味合いを持っていたように思われる。なお棉畑地の所有者には、掃除人カーストや労務人カーストなどの低カーストが含まれており、彼らも綿花の売却を通じて現金収入を獲得する方途があったことは注目される。オリッサの内陸丘陵地においても貨幣による交易が浸透していたこと、そしてさらに貝貨が経済だけでなく社会体制や行政体系においても重要な意味を有していたことは特に強調される必要がある。

18世紀のオリッサにおいては、複数の種類の貨幣が売買に用いられていた。カタックの地方長官であったリチャードソンは1814年に、カタック地方（オリッサ沿岸部地方）では200万ルピー弱の資本が流通しているの見積もった。そしてその内訳は金貨1、銀貨24、銅貨4、貝貨11の割合であるとしている [De 1952b; 黒田 2003: 78]。相当の量の貝貨が当時のオリッサ・カタック地方には存在していたのであり、貝貨による経済活動は重要な割合を占めていたことがわかる。ここにおいて、ルピー銀貨が流通する大口で通地域的な交換領域と、小額貨幣の貝貨や銅貨が流通する日常的な生活世界の交換領域は重層的に存在していた [Perlin 1984; 黒田 2003]。貨幣は多元的に存在し、それに応じた自律的な交換領域 (spheres of exchange) もまた多元的に存在していたのであった [Barth 1967; Bohannan 1955, 1959; Dalton 1961; Gregory 1996, 1997, 2006; Kopytoff 1986; Piot 1991]。

オリッサの後背地において生産された綿布の一部は、商人カーストたちによってオリッサの港市に運ばれ、英国人やオランダ人の貿易商に売却された。オリッサ沿岸のピプリ（1630年設立）およびバラソール（1633年設立）には、英国およびオランダの商館が置かれた。それらは17世紀のベンガル湾交易において特に重要な役割を果たした [Prakash 1998]。1669–1679年に、英国人貿易商のボウリーがオリッサについて書いた記録には「かなりの量のすばらしい品質のキャラコ（平織綿布）が生産され、英国人とオランダ人に売却されている。ベンガル湾のバラソールにある彼らの領土に、完成品が陸路より運ばれてくる」とある<sup>14)</sup>。これは後背地で生産された綿布が港の近くの商館にまで運ばれ、そこから海外に売りに出されていたことを示している。オリッサの田舎の村落は、こうした綿布貿易を通じて世界経済とつながっていたのである。ハイマンのいうごとく、「インド洋の交易は、ローカルな生産・消費パターンおよび貨幣の発達を統合したのであり、それはインド洋特殊の『世界経済』を結果したのであった」 [Heimann 1980: 48, cf. Perlin 1993; Yang 2004]。

市場経済が興隆し、国家の行政技術が発展した近世オリッサにおいては、かかる市場経済と国家行政、さらに地域共同体の職分権体制は、貨幣、商人、書記、戦士などの媒介によっ

---

14) Capt. Thomas Bowrey, 'A Geographical Account of Countries round the Bay of Bengal: 1669–1679' found at India Office Library under 'MSS EUR D 782' [cf. Bowrey 1997].

て、相互補完的に機能していたのであった。

### Ⅲ 近世オリッサにおけるパーソンフッド・パトリオティズム・信仰

さて、18世紀オリッサについてこれまでみてきたような政治経済的発展はたしかに重要であるが、オリッサの近世的発展はそれらの側面に限られているわけではなかった。その時代には王権イデオロギーや宗教理念そして個々の人格（パーソンフッド）やアイデンティティにおいても大きな変容がみられる。そして文化宗教的変容と政治経済的変容とは、社会という場を媒介として密接に関連していたのである。以下では、こうした近世についての、より全体的な理解を進めるために、その時代における神聖王権およびジャガンナータ信仰と人々の人格の関係について考察したい。

前植民地期の職分権体制は、王国の支配制度および地域の社会構造、そしてそのなかにおける各人の人格と密接に結びついたものであったといえよう。人々の人格やアイデンティティと職分権とのあいだには、単なる制度的な位置づけにとどまらず、もっと密接で有機的な関係があった。伝統的なインド世界観においては、ひとの身体-人格 (body-personhood) の生モラル的な性質は、生命過程における流体的な「記号=物質」のやりとりをつうじて形成されたのであり、いかなる職分を保有するかは身体-人格の形成において重要な意味を持っていた。なお、ここでいう「生モラル」(bio-moral) は、生物学的な生命過程と社会政治的モラルが不可分にある状況を指すが [Alter 2000; Bayly 1998; 田辺 2006], インド世界においてはポピュラーかつオーソドックスな世界観である。またここでいう「記号=物質」(code-substance) は、世界や身体を形成する全ての物質が、同時に価値や意味を有する記号としての性質を持っている事態を指すための用語である [Marriott 1976; Marriott & Inden 1977]。生命過程は、食や性におけるように行為・感覚器官をつうじて記号=物質 (生モラル的物質) を交換することによって成立するのであり、必ず他者・自然との相互作用を含むものである。インドでは、生命過程における行為自体——たとえば何を食べて誰と交わるか——が社会・政体の生モラル秩序および自己の身体-人格のそこにおける位置づけ (パーソンフッド) を構成していた。

こうした生モラル秩序において、ひとの身体-人格は、食物に大きな影響を受けると考えられていた。そして職分権体制は、職分に応じた食物を提供するシステムでもあった。職分に基づいて水田耕作地 (あるいは生産物の取り分) を享受し、そこでできた穀物を食することはその「土地を食む」(*jami khāibā*) と表現される。職分地の生モラル的性質は、そこで生産された穀物を媒介として、それを食べる職分権者の身体-人格を形成すると考えられていたわけである [Daniel 1984; Marriott 1976]。こうして身体、人格、土地、食、職分のあいだには、生モラル的性質における深いつながりが置かれていた。ひとはそれぞれ、自分の職分に応じた土地を享受し、その土地を「食んで」、自らの身体とその延長としてのリ

ニーズの再生産を果たし、王国や共同体のなかで与えられた職分を遂行していくことで、自らの固有の人格とアイデンティティを確保していたのであった。

職分権体制は、地域の守護女神への信仰とも関連していた。城塞の守護女神は、マントリ城塞のラーマチャンディー女神のように、地域における「母なる大地」を代表した。母なる女神の庇護があってはじめて、地域共同体の繁栄と豊穡と勝利は可能であると信じられていた。地域共同体の職分権体制における義務は、ある位相においては、地域女神への供儀的奉仕として意味づけられた。マントリ城塞のラーマチャンディー女神祭祀では、全ての職分保有者が何らかの儀礼的役割を果たし、その儀礼の最終日にはそれぞれの日常的な義務・役割の「仕事始め」を行う [田辺 1993; Tanabe 2003]。これはそれぞれの職分が女神への供儀的奉仕として存すること、そして女神の聖なる力を受けてはじめて地域社会の再生産が可能であることを雄弁に上演＝表象している。職分権体制において与えられた土地（あるいはその生産物としての穀物）は、女神の身体そのものの一部であり、母の子たるその土地の住民は、母なる大地によってその身体を養われるのである。

すでに述べたように17-18世紀のオリッサにおいては、王が職分の源泉として位置づけられた。つまり職分権保有者たちは、王から職分権を受けて職分地を「食む」ことで、王を中心とする支配体制のなかに有機的・身体的に包摂されたのである。あるいは、王に与えられた「土地を食む」ことにより、分与された王の主権の一部を身体化したのであるともよい。

さらに王は、供儀組織としての職分権体制の供儀祭主であると考えられた。供儀的奉仕の全体をまとめる中心であり、供儀の主体を代表するのが王であった。ラーマチャンディー女神祭祀においては、城塞首長のみでは女神のあらぶる力を統御することができず、王が供儀祭主の役割を果たすことによって初めて、女神の力が慰撫され吉祥なる庇護の力に変容する。「王の供儀」を受け入れた女神は、その祝福の力を「王の太刀」に宿らしめるのである。王の太刀を預かるのは、王と女神から権威を授けられた城塞首長である。全ての職分権保有者は自らの仕事を奉仕としてなすことが求められる。それぞれの職分は、供儀祭主たる王によって与えられた義務であり、また女神への供儀的奉仕である。それは、王国全体の再生産を司る王の主権の一部が分与されたものとして位置づけられる。

さらに、クルダー王がプリーのジャガンナータ寺院と密接な関わりを持つことにより、職分権体制における供儀的奉仕はジャガンナータ信仰とも結びつけられることになる。オリッサの支配者たるガジャパティ（象王）は、伝統的にジャガンナータ神の地上の代理としてその権力の正当性を確保していたのであった。代々のクルダー王は、ガジャパティとしてジャガンナータ寺院との儀礼宗教的な結びつきをよりいっそう強いものとした。ノロシンホ・デボ王（1622-1647）は、プリーのジャガンナータ寺院の南側に王宮を建設しただけでなく、ジャガンナータ神の儀礼をめぐって、複雑な義務と権利の体系を詳細にわたって定め、自らもそのなかで重要な役割を担った [Kulke 1978b: 332]。これは王権の儀礼化の進展である

ととらえることができよう。さらにクルダー王は、ジャガンナータ神の「第一の奉仕者」<sup>15)</sup>としてのみでなく、自らの一層の神聖化をはかった。クルケによると、「ガジャパティは、クルダー王の時代に始めて神王（タークル・ラージャー *thākur-rājās*, デーヴァ・ラージャー *deva-rājās*）として知られるようになった」という [quoted in Marglin 1985: 125]。17世紀から18世紀におけるこのような王の儀礼化および神聖化の動きは、クルケが正しく論ずるように、クルダー王が対外的に自らの軍事的・政治的な権力を儀礼的権威によって補完しようとしたことが背景としてあるだろう [Kulke 1978b]。ただしもうひとつは、王の権力・権威が地域社会へと浸透するなかで、職分権を付与し正当化する供犠祭主としての王が、供犠組織としての職分権体制の権威的な中心たる位置づけを担うようになったという、国家と地域社会の関係の変容という対内的な背景においても理解される必要がある。

神聖化したガジャパティ王を供犠祭主として位置づけることにより、供犠組織たる職分権体制の成員たちは、自らの職分を神聖王権そして絶対神との関連においてとらえることができるようになった。職分権体制における全ての義務と権利は、神聖王により与えられたものとされた。そして、それぞれの職分権保有者たちは、供犠祭主たる神聖王から与えられた自らの職分を地域の守護女神そして国家神ジャガンナータ神への供犠的奉仕として行ったのであった。

これは、近世オリッサにおけるバクティ（信愛）運動とも関連していた。ムカジーによると17-18世紀に「ヴィシュヌ派信仰<sup>16)</sup>は、オリッサにおける支配的な宗教になった」。そこでは「典型的なオリッサ流のヴィシュヌ派信仰、ジャガンナータ信仰、チャイタニヤ信仰がまざっていた」[Mukherjee 1978: 319]。近世オリッサにおいてヴィシュヌ派信仰には、ゴウリヤ（ベンガル流）・ヴィシュヌ派とウトカリヤ（オリッサ流）・ヴィシュヌ派の二つがあった。

ベンガル流とオリッサ流は共にチャイタニヤを祖師とするが、それらの思想内容には大きな違いがあった。前者においては、ジャガンナータ神は最高神クリシュナの化身であり、後者においては、ジャガンナータ神がそのまま最高神であるとされた。また前者では、救われる道は「信仰のみ」と説かれたが、後者では「信仰、智慧、ヨーガ」の統合が必要であるとされた [Das 1951; Das 1988; Deb 1984; Dei 1988]。オリッサの農村地帯では、ウトカリヤ（オリッサ流）・ヴィシュヌ派の影響力が圧倒的に強かった。特にボロラム・ダス、ジョゴンノト・ダス、オチュトノンド・ダス、オノント・ダス、ジョソボント・ダスの「五人衆」（ボンチョソカ *Pañcasakhā*)<sup>17)</sup> は、人々のあいだで大きな影響力を持っていた。五人

15) ジャガンナータの「奉仕者」であると自らを規定した最初の王は、カピレーンドラ（在位1435-1467）である [Kulke 1978a]。

16) ヴィシュヌ派信仰 (Skt.: vaiṣṇava, Oriya: baiṣṇaba, Vaishnavism) とは、ヒンドゥー教のなかのヴィシュヌ神あるいはその化身に対する信仰を中心とする宗派を指す。

17) 彼らは、チャイタニヤの弟子筋として16世紀に活躍したとされる宗教家・文筆家である。五人衆の著作はウトカリヤ・ヴィシュヌ派の聖典として名高い。なお、ボンチョソカの著作は16世

衆のひとりであるジョゴンノト・ダスが16世紀に再編集して意識したバゴボト（バーガヴァタン、クリシュナの遊戯<sup>リラー</sup>を中心に歴史、地理、哲学、宗教などの知見をまとめたもの。Skt.: *Śrīmad Bhāgavatam Mahāpurāna*, Oriya: *Śrīmad Bhāgabata Mahāpurāna*) は、近世オリッサにおいてバクティ運動のバイブルとなった。各集落には本聖典を祀る「バゴボトの家」が建てられ、夕方にはバゴボトが朗読され村人たちが耳をかたむけた。なおこれは伝統的慣習として細々ながら現代に続いている。また戦士カーストのコンダヤトたちは、ヴィシュヌ派の僧を自らの世帯のグルとして受け入れ、その結果、僧院が村落部を含む各地に建てられた。古くはマニトリ城塞にもヴィシュヌ派の僧院があった。1776-1806年の貝葉文書によると、その維持のために土地の寄進も行われている。

近世オリッサの民衆世界において圧倒的な影響力を持ったヴィシュヌ派の教えは、在家信者が自らの全ての義務を絶対神への奉仕として行うべきことを説いた。オリッサのヴィシュヌ派信仰において、民衆の帰依の対象となったのはジャガンナータ神であった。近世のジャガンナータ信仰においては、カルマ・ヨーガ（行為の道）とバクティ・ヨーガ（信愛の道）は融合していた。そこにおいて人々は、最高神ジャガンナータへの供犠として信愛とともに行為を捧げるべきであるとされたのであった。もちろん、こうした供犠の考え方は近世以前にも存在し、『バガヴァッド・ギーター』などの古典にもみられるものであるが、「日常的な義務を神への供犠的奉仕として行う」という考えが、バクティ運動とともに民衆に広く共有されて、「供犠祭主国家と供犠共同体」の社会政治体制と結びつけられたことは近世特有の現象であるといえよう。またこうした現象は、ガジャパティ王の儀礼化と神聖化および供犠祭主としての王の権威の地域社会への浸透とも深く関わっていた。

職分権体制に規定された義務・権利は、生モラル的交換をつうじて、人々のアイデンティティおよび身体一人格と結びつき、さらにそれは、信愛に基づく供犠的奉仕の考え方をつうじて、地域の女神および神聖王そしてジャガンナータ神への信仰と結びつけられた。こうして、それぞれの職分権保有者は「今ここ」という地域社会の限られた時空間にしながら、供犠組織共同体の成員として日常的な義務を神への奉仕として果たすことにより、自らのアイデンティティと行為を宇宙論的に普遍的な価値や存在とにつなげることができた。ここにおいて神聖王は、供犠祭主そして神の地上の代理として、共同体成員と最高神とを媒介する役割を果たしたのであった。

このようにみると、人々の人格およびアイデンティティは、もはや地域共同体の社会組織に埋め込まれていたという位置づけ以上のものであった。それぞれのなすべき義務は、地域

↙ 紀より後世になって編纂されたものではないか、またボンチョ・ソカたちがチャイタニヤと同時代の16世紀より後に生きた人々ではないかという修正的な見解が学術的には有力になりつつある [Samantaray 1975]。ボンチョ・ソカについての文化的通念がいかに歴史的に形成されたかについては、N. Samantaray [1982] が論じている。

共同体における職分権体制において定義され、そこにおいて遂行されたのであるが、人々のアイデンティティは、神聖王の代表する王国およびジャガンナータ神のあらかず宇宙そして絶対存在との関係において認識されたのであった。ローカルな自己をより広い王国および宇宙や絶対存在と結びつけるような自省的認識は、人々の主体性の近世的な発展といえるであろう。それは、この時期に、王権が地域社会に浸透していったことと関連している。人々のアイデンティティの基礎には、自らの職分権と神聖王およびジャガンナータ神との関係が置かれたのであるが、これは、近世王権の権力作用が個人のレベルにまでおよび、個人の主体形成に影響したものと考えられる。フーコーにならっていえば、近世オリッサにおける人々は、自らの日常的な義務を王とジャガンナータ神への奉仕と位置づけることにより、王権の権力作用に従属し (subject to)、同時に主体 (subject) 形成をしたのである [Foucault 1977, 1978, 1983]。

ただし、フーコーの分析するヨーロッパとインドの違いにも注意する必要がある。ヨーロッパにおいては、規律的権力が個人によって内面化され、自らの倫理とされたのであった。これはデカルト・カント的な精神と身体の二分法に関わる。人々は市民として、精神における理性によって身体の欲望を統御することを求められたのである。一方近世オリッサにおいて、身体そして欲望は単に客体化されたり否定されたりすることはなかった。人々の人格およびアイデンティティまた果たすべき義務倫理の基礎として、身体は重要性を有していた。身体は、生態・社会の生モラル的な交換関係——婚姻、職分地の受領、職分地からの穀物収穫、料理、食事など——を通じて構築されたのであったが、それはそのままその身体一人格の社会的位置づけを構成するものであった。また欲望は、それぞれの身体の性質 (guna, 「徳」) に応じて与えられたものであり、抑圧されたり否定されたりするものではなく、むしろ神への奉仕に向けて導かれるべきものであった。バゴボトによれば、性欲 (kāma) でさえ、クリシュナ神を愛する牧女 (gopī) におけるごとく、それが信愛とともに神に向けられる限りよきものであった<sup>18)</sup>。そしてまさに近世オリッサにおいては、地域社会における自らの身体・欲望を、神聖王を媒介として、絶対神クリシュナ=ジャガンナータへの奉仕のために向けることが求められたのであった。

近世オリッサにおいては、地域社会と王権の新しい関係が樹立されたといえるが、それは、地域社会のレベルにパトリオティズムをもたらすものであった [Tanabe forthcoming]。このパトリオティズムは、人々の地域社会レベルの土地 (共同体と地母神を含む) への愛着を、オリッサという地方国家レベルにおける王権およびその政治神学に結びつけるものであった。前植民地期インドのパトリオティズムについての最近の研究は、パトリオティズムの非排他

18) クリシュナへの性愛の宗教的表現については、小倉訳『バガヴァットム』[小倉・横地 2000] を参照のこと。

的に包摂的な側面に注目し、同じくには属するという感覚が、民族や宗教の異なる複数の社会集団が共存することを可能にしたことを指摘する [Bayly 1998; Ray 2003]。

クルダー王国の場合、ガジャパティ神聖王は「真の支配者」であるジャガンナータ神の地上の代理であり、それぞれの地域共同体にとっての供犠祭主の役割を果たした。共同体成員は、本来さまざま異なる価値観や生活文化を有するが、職分権体制において職分を得ることにより、地域共同体という政治倫理的空間を共有することができた<sup>19)</sup>。そしてそれは、供犠祭主たる王を媒介としてパトリオティズムともつながったのであった。これは、ダークスの次のような指摘に対応する。「南インドの王国の政治経済は、権力および資源に対するアクセスが、王権についての文化特殊的な意味に基づいていたという意味で『モラル』であった」 [Dirks 1987: 134]。ただし、このことは、そこに固定的なモラルの体系があったことを意味しない。ピーボディが指摘するごとく、「政治関係に関わる意味をめぐっては、さまざまな緊張と分裂があった」のである [Peabody 2003: 8]<sup>20)</sup>。

なおここで、供犠のメカニズムは決して一元的なヒンドゥー教の体系のなかにあるものではなかったことを強調しておきたい。供犠組織においては、ジャガンナータ神や神聖王の宇宙論的・宗教的な意味について、自らの立場に応じて、さまざまな形で理解する余地が与えられていた。バラモンと戦士あるいは「不可触民」を比較すると、宗教実践も信仰内容も大きく異なっている。さらにムスリムは、自らの職分につき、王権と支配に関わる名誉ならびに特権の体系のなかで、政治倫理的にしかしながらイスラームとは無関係なものとしてとらえていたようである。前植民地期インドの供犠論において、パトリオティズムに基づく王権へのコミットメントは、差異を通じた統合に依っていた。ここにおいて統合とは、皆が共通の要素を持つことを通じてではなく、それぞれの部分が自らの義務を全体のためになすことを通じて実現された。

オリッサのパトリオティズムの注目すべき点として、ジャガンナータ信仰やガジャパティ王権を中心とする交換のネットワークが、複数で多元的な社会集団に属する人々を、同質性を強いることないまま、国家レベルの制度や体系につなげる役割を果たしたことがあげられる。地域共同体の職分権体制はそもそも多元的な社会集団の共生を可能にするものであった

19) 前植民地期オリッサにおける、人々のアイデンティティの基盤としては、まず地域共同体が重要である。それは、世襲した土地・家屋・職分・「聖なる森とローカルな寺社」 [Schaar 1981]、そして親族集団・集落のまとまりからなるもので、いずれも人々の身体-人格を生モラル的に構成するものであった。シュリーニヴァースも南インドについて次のようにいう。「ひとは、自分のナードゥ（南インドにおける地域共同体、郷）にたいして強い愛着をいだいていた。……自分のナードゥに対する愛郷心は広くて深いものであった」 [Srinivas 1952: 66, 69. 括弧内は田辺による補足]。地域共同体に対する愛郷心は、近世における神聖王の介在によって、王国に対するパトリオティズムそして絶対神への信仰と結びつけられたのであった。

20) 私は、モラルをめぐって矛盾、緊張、対立、対話、折衝を含むコミュニケーションが行われる社会空間を「モラル社会」という概念でとらえたいと考えている [田辺 2006]。

し、またその国家装置への編入において、職分権の源泉および供犠祭主としての王は、あらゆる多元なるものを束ねる中心として機能したのであった。ショットターが指摘するとおり、「他者との連帯があるということは、皆が同じように考え感じているということの意味ではない。それはただ、自分が自分であることが、どれほど他者との応答的な関係に依存しているかということを知り、必要なときに、他者との共通の場を持つとすることである」[Shotter 1993: 201 強調原文]。インド社会においては、必要なときに連帯をもたらしてくれる、多くの種類の関係—家族、リネージ、姻族、集落、村落、ジャーティなど—がある。

地域の人々は、職分権および供犠的奉仕を通じて、クルダー王国の中心を占めたジャガンナータ神および王との関係を樹立したのであったが、同時に、自らが居住する地域共同体や所属する社会集団（カーストや宗教）へのアイデンティティを持ち続けたのであった。人々は、特定の地域共同体に住み、そこで特定の役割を果たしながら、同時に、ジャガンナータ信仰やガジャパティ王権によって代表される、より普遍的な政治・宗教的価値との関連において自らの存在を反省的にとらえ、ジャガンナータ神およびガジャパティ王を中心とするオリッサというくにへの帰属意識とパトリオティズムを形成するにいたったのである。

## お わ り に

本論では、クルダー王国のマントリ城塞の事例をとりあげながら、近世オリッサにおける職分権体制の重要性について論じ、それが地域共同体における社会・経済・政治関係を規定していたと同時に、市場経済や国家行政の働きを支える役割も果たしていたと述べた。近世オリッサの地域社会における分業関係と資源分配を規定していたのは、これまでの研究で想定されていたような村落レベルのジャジマーニー・システムではなく、国家と村落のあいだの地域共同体レベルにおける職分権体制である。

また職分権体制は、地域社会と国家との関係においても重要な役割を果たした。地域共同体は、社会経済的な再生産の単位として重要であったが、それは決して自律したものではなかった。国家権力が地域社会に浸透する過程において、王は、職分権体制において分与される職分地、特権、名誉などの全ての資源の源泉として、また供犠組織たる職分権体制を束ねる中心の供犠祭主として、自らの権威を確立したのであった。こうした権威の確立は、地域社会の資源を分類し、数量化し、記録する国家行政の査察権力が地域社会にまで及んだことも意味していた。こうして、城塞郷およびそこにおける職分権体制は、近世の国家機関に有機的に統合されたのである。

しかし注意すべきは、だからといって全ての職分保有者が直接王の支配下に属するようになったわけではなかったことである。国家は、城塞における軍事と行政の機能をできるだけ直接的に統御しようとしたのであったが、一方で、人的・物的資源の生産と再生産については、地域社会の職分権体制に依存していた。国家の軍事と行政において重要な役割を果たし

ていた首長、書記、会計、戦士たちは、王国の支配装置の一環として城塞に配置されていたのだが、彼らも地域社会の職分権体制のなかに埋め込まれた存在であった。王は自らの支配権をこうした役職者たちに分与することにより、地域レベルにまでその権力を浸透させることが初めて可能であったのである。こうして城塞郷の職分権体制は、近世国家による査察的権力の浸透および国家装置への包摂と、地域共同体の再生産における自律性への志向との両方のバランスのなかに置かれていたのであった。

近世オリッサにおける社会体制を以上のように理解することにより、従来のカースト論とは異なる視点をインド社会論に提示できたと考えている。前植民地期インド・オリッサにおいてカーストは、デュモンが論じるような社会的宗教的ヒエラルヒーに還元できるものではなかったことは明白である [Dumont 1966]。当地において、カーストはむしろ、職分権体制における地位と役割を示すものであり、それは世襲的に継承されるが、新たに獲得することも可能なものであった。

一方、新ホカート派たちは、インド社会の構造を説明するにあたって、供犠組織としてのカーストにおける王の中心性を論じている [Dirks 1987; Hocart 1950; 1970; Quigley 1993; Raheja 1988]。近世においては、王の権威を中心として職分権体制が再構築されたわけであり、その意味では新ホカート派たちの主張はある程度正しいといえるであろう。しかし、王の中心性がカーストあるいは職分権体制の本質に属するものであると言い切ることはできず、その点については注意深い検討が必要である [cf. Dirks 1987]。

インデンと辛島によると、中世においてカーストが形成されたのは、王権の求心性によるものではなく、むしろ王権の弱体化の結果である。インデンによると、「ヒンドゥー王権の崩壊が、……『カースト』の近代的な形式に近いものの形成につながった。つまり、インド文明のこの特徴的な制度は、早くとも13世紀か14世紀まで現れないのである。そして、カーストは、ヒンドゥー王権の弱体化および崩壊の原因ではなく、その結果である」 [Inden 1990: 82 強調原文]。辛島もまた次のように論じる。「タミルにおいては、ジャーティの形成そしてその結果としてのヒエラルヒーの再編成は、13世紀頃の政治不安と社会混乱の時期に促進された。……その形成の過程は、権力を得た新しい共同体をバラモニックな社会秩序に含み入れたことによる。そして、新旧の集団間、また新しい集団間のヘゲモニー争いが、カースト・ヒエラルヒーの再編成をもたらした。この新しいカースト・ヒエラルヒーは、王によってではなく、地域の人々が組織した団体によって統制されたのであった」 [Karashima forthcoming]。

少なくとも、オリッサの例で考える限りは、全ての職分権の源泉としての王の権威が確立された過程は、カースト組織の本質に属するものではなく、むしろ近世における新たな歴史的展開の文脈で理解されるべきである。国家が個々の職分権の詳細にまで査察的権力を及ぼし、王が職分権の源泉としての権威を確立したのは近世においてであり、このときに地域共同体の供犠組織たる職分権体制はイデオロギー的にも自律性を失い、供犠祭主としての王の

存在を必要とするようになったのであった。

国家は、イデオロギー上だけでなく、より実質的な統御を城塞の行政・軍事装置に及ぼそうとしたのであったが、基本的には行政および軍事の運営において、職分権体制に依存していることには変わりはなかった。国家は王国レベルの戦士や行政官に対しては俸給を支払ったが、その財源は職分権に対してかけられた税であり、そもそも地域社会で生産された資源を地域社会に居住する戦士や行政官に分配するもので、地域社会における職分権体制の存在を前提としていた。近世オリッサにおいてカーストは、地域社会の自律性および王権の中心性のあいだの微妙な——そしてイデオロギー的でも現実的でもあった——相互関係のなかに置かれていたといえるだろう。前植民地期インドのカーストは、デュモンの社会・宗教的なヒエラルヒーにも、新ホカート派的な王権の政治文化にも還元できるものではなく、むしろ具体的な歴史的文脈における国家と社会の複雑な関係のなかで理解されるべきであろう。

18世紀のクルダー地域において、城塞郷の地域共同体は国家装置の一環として包摂と統合がなされ、行政と軍事の多元的中心のひとつとしての機能を有していた。またここでとりあげた乾燥丘陵地の地域共同体は、商品の生産と消費の後背地的な拠点として、市場や交易の発展と連動的な関係を確立した。地域社会の、国家および市場との関係の緊密化は、近世オリッサにおけるジャガンナータ信仰やガジャパティ王権を中心とするパトリオティズムの発生とも関連していた。身体＝人格と地母神との有機的關係に基づく人々の地域共同体への愛着は、神聖王権の媒介をつうじて、オリッサの「真の支配者」であるジャガンナータ神へと結び付けられた。ジャガンナータ神の地上の代理であるガジャパティ王が、地域共同体における全ての職分の源泉であり、供犠組織としての職分権体制の中心的な供犠祭主として位置づけられることにより、職分権体制における義務と役割は、地域の女神だけではなく神聖王およびジャガンナータへの供犠的奉仕としても位置づけられるようになったわけである。バクティ（信愛）運動の民衆への広がりと同時に、地域共同体においてさまざまな役割と地位を持つ人々は、自らの日常的な義務を供犠的奉仕としてジャガンナータ神およびジャガンナータ神のくゝに捧げるようになった。

人々は、自らの職分を神および王への奉仕として果たす限り、それぞれの多元的な生活文化や信仰を維持することを許されていた。近世クルダーは、こうした「供犠祭主国家と供犠組織共同体」というメカニズムをつうじて、重層性と多元性を包含するような「差異を通じた統合」を実現していたのである。

ただしこれは静態的な調和がそこにあったことを決して意味してはいない。想像のくゝの政治文化的な枠組みのなかで、オリッサにおける軍事的な対立や競争は、ジャガンナータ信仰における儀礼的特権やガジャパティ王の称号の争奪合戦という様相を呈した。ここにおいて、軍事的な競争は常に宗教儀礼的な争いでもあり、反対に宗教儀礼的な対立はしばしば軍事的な紛争へと発展した。

人々は軍事的あるいは行政的な手腕を磨き、よりよい職分を獲得しようと競争した。そし

て戦士や首長としての職分を得るためには、実際の戦争で自らの能力を証明しなければならなかった。またグローバルな商品交易のなかで発展する市場経済において、人々は利潤の増大を追求し、成功した者たちは平野部で村長や会計の職分権を購入した。18 世紀クルダーの王権と職分権体制の基盤であった「供犠祭主国家と供犠組織共同体」の枠組みは、近世の政治経済的なダイナミズムと連動するものであったといえよう。

## 参 考 文 献

- Alavi, S. (1995) *The Sepoys and the Company: Tradition and Transition in Northern India 1770-1830*. New Delhi.
- Alter, J. S. (2000) *Gandhi's Body: Sex, Diet, and the Politics of Nationalism*. Philadelphia.
- Barth, F. (1967) Economic spheres in Darfur In: Firth, R. (ed.) *Themes in Economic Anthropology*. London, 149-74.
- Bayly, C. A. (1983) *Rulers, Townsmen and Bazaars: North Indian Society in the Age of British Expansion, 1770-1870*. Cambridge.
- Bayly, C. A. (1988) *Indian Society and the Making of the British Empire*. Cambridge & New York.
- Bayly, C. A. (1998) *Origins of Nationality in South Asia: Patriotism and Ethical Government in the Making of Modern India*. New Delhi.
- Bohannon, P. (1955) Some principles of exchange and investment among the Tiv. *American Anthropologist* 57, 60-70.
- Bohannon, P. (1959) The Impact of Money on an African Subsistence Economy. *The Journal of Economic History* 19 (4), 491-503.
- Bowrey, T. (1997) *A Geographical Account of Countries round the Bay of Bengal, 1669-1679*. New Delhi.
- Chatterjee, K. (1996) *Merchants, Politics and Society in Early Modern India: Bihar 1733-1820*. Leiden.
- Dalton, G. (1961) Economic Theory and Primitive Society. *American Anthropologist* 63 (1), 1-25.
- Daniel, V. E. (1984) *Fluid Signs: Being a Person the Tamil Way*. Berkeley.
- Das, C. (1951) Achyutānanda and the Panchasakhā. In: *Studies in Medieval Religion and Literature of Orissa*. Santiniketan, 1-32.
- Das, S. P. (1988) *Sahajiyā Cult of Bengal and Pancha Sakha Cult of Orissa*. Calcutta.
- De, S. C. (1952a) The Cowry Currency in India. *Orissa Historical Research Journal* 1 (1), 1-10.
- De, S. C. (1952b) Cowry Currency in Orissa. *Orissa Historical Research Journal* 1 (2), 10-21.
- Deb, A. K. (1984) *The Bhakti Movement in Orissa: A Comprehensive History*. Calcutta.

- Dei, S. (1988) *Vaisnavism in Orissa*. Calcutta.
- Dirks, N. B. (1987) *The Hollow Crown: Ethnohistory of an Indian Little Kingdom*. Cambridge.
- Dumont, L. (1966) *Homo hierarchicus. Le système des castes et son implication*. Paris.
- Foucault, M. (1977) *Discipline and Punish: The Birth of the Prison*. Sheridan, A. New York.
- Foucault, M. (1978) *The History of Sexuality*, Volume I. Harmondsworth.
- Foucault, M. (1983) The Subject and Power. In: Dreyfus, H., Rabinow, P. and Foucault, M. (eds) *Beyond Structuralism and Hermeneutics*. Chicago, 208 – 226.
- Gadgil, M. and Guha, R. (1992) *This Fissured Land: An Ecological History of India*. New Delhi.
- Gordon, S. (2002) Symbolic and Structural Constraints on the Adoption of European-style Military Technologies in the Eighteenth Century. In: Barnett, R. B. (ed.) *Rethinking Early Modern India*. New Delhi, 155 – 191.
- Gregory, C. A. (1996) Cowries and Conquest: Towards a Subaltern Quality Theory of Money. *Comparative Studies in Society and History* 38 (2), 195 – 217.
- Gregory, C. A. (1997) *Savage Money: The Anthropology and Politics of Commodity Exchange*. Amsterdam.
- Gregory, C. A. (2006) Cowries and Conquest: Towards a Subaltern Quality Theory of Money In: Yengoyan, A. A. (ed.) *Modes of Comparison: Theory & Practice*. Ann Arbor, 193 – 219.
- Heimann, J. (1980) Small Change and Ballast: Cowry Trade and Usage as an Example of Indian Ocean Economic History. *South Asia* 3 (1), 48 – 69.
- Hocart, A. M. (1950) *Caste: A Comparative Study*. London.
- Hocart, A. M. (1970) *Kings and Councillors*. Chicago.
- Hossain, H. (1979) The Alienation of Weavers: Impact of the Conflict Between the Revenue and Commercial Interests of the East India Company, 1750 – 1800. *Indian Economic and Social History Review* 16 (3), 323 – 345.
- Inden, R. B. (1990) *Imagining India*. Oxford.
- Karashima, N. (1984) *South Indian History and Society: Studies from Inscriptions A. D. 850-1800*. New Delhi.
- Karashima, N. (1992) *Towards a New Formation: South Indian Society under Vijayanagar Rule*. Delhi.
- Karashima, N. (2002) Importance of Nayaka Studies and Their Development: A Critique of Burton Stein. In: *A Concordance of Nayakas: The Vijayanagar Inscriptions in South India*. New Delhi, 9 – 27.
- Karashima, N. (forthcoming) The Emergence of New Imprecations in Twelfth- and Thirteenth-Century Tamil Inscriptions. In: Jha, D. N. (ed.).
- Kolff, H. A. D. (1990) *Naukar, Rajput and Sepoy: The Ethnohistory of the Military Labour*

- Market in Hindustan*, 1450 – 1850.
- Kopytoff, I. (1986) The Cultural Biography of Things: Commoditization as Process. In : Appadurai, A. (ed.) *The Social Life of Things: Commodities in Cultural Perspective*. New York, 64 – 91.
- Kotani, H. (2004) Review: Hindu Kingship and Polity in Precolonial India. By Norbert Peabody. Cambridge University Press, 2003. *International Journal Of Asian Studies* 1 (1), 206.
- Kulke, H. (1974) Kings without a Kingdom: The Rajas of Khurda and the Jagannatha Cult. *South Asia* 4, 60 – 74.
- Kulke, H. (1978a) Jagannātha as the State Deity under the Gajapatis of Orissa. In : Eschmann, A., Kulke, H. and Tripathy, G. C. (eds) *The Cult of Jagannath and the Regional Tradition of Orissa*. New Delhi, 199 – 208.
- Kulke, H. (1978b) The Struggle between the Rājās of Khurda and the Muslim SubahdArs of Cuttack for Dominance of the JagannAtha Cult. In : Eschmann, A., Kulke, H. and Tripathy, G. C. (eds) *The Cult of Jagannath and the Regional Tradition of Orissa*. New Delhi, 321 – 342.
- Kulke, H. (1995) The Early and the Imperial Kingdom: A Processural Model of Integrative State Formation in Early Medieval India. In : Kulke, H. (ed.) *The State in India 1000-1700*. New Delhi, 253 – 262.
- Mahapatra, K. N. (1969) *Khurudhā Itihāsa*. Cuttack.
- Marglin, F. A. (1985) *Wives of the God-King: The Rituals of the Devadasis of Puri*. New Delhi.
- Marriott, M. (1976) Hindu Transactions: Diversity without Dualism. In : Kapferer, B. (ed.) *Transaction and Meaning*. Philadelphia, 109 – 142.
- Marriott, M. & Inden, R. (1977) Toward Ethnosociology of South Asian Caste Systems. In : David, K. (ed.) *The New Wind: Changing Identities in South Asia*. The Hague, 227 – 238.
- Menon, D. M. (2000) Houses by the Sea: State Experimentation on the South-west Coast of India, 1760 – 1800. In : Chandoke, N. (ed.) *Mapping Histories: Essays Presented to Ravinder Kumar*. New Delhi, 161 – 186.
- Mukherjee, P. (1978) Caitanya in Orissa. In : Eschmann, A., Kulke, H. and C., T. G. (eds) *The Cult of Jagannath and the regional Tradition of Orissa*. New Delhi, 309 – 319.
- Nandy, A. (1983) *Intimate Enemy: Loss and Recovery of Self under Colonialism*. New Delhi.
- Pattanaik, P. K. (1979) *A Forgotten Chapter of Orissan History (with special reference to the Rajas of Khurda and Puri) 1568-1828*. Calcutta.
- Peabody, N. (2003) *Hindu kingship and polity in pre-colonial India*. New York.
- Perlin, F. (1984) Growth of Money Economy and Some Questions of Transition in Late Pre-colonial India. *Journal of Peasant Studies* 11 (3), 96 – 107.

- Perlin, F. (1985a) Concepts of order and comparison, with a diversion on counter ideologies and corporate institutions in late pre-colonial India. *Journal of Peasant Studies* 12 (2-3), 87-165.
- Perlin, F. (1985b) State Formation Reconsidered, Part Two. *Modern Asian Studies* 19 (3), 415-480.
- Perlin, F. (1986) Monetary Revolution and Societal Change in the Late Medieval and Early Modern Times — A Review Article. *Journal of Asian Studies* 45 (5), 1037-1049.
- Perlin, F. (1987) Money-use in Late Pre-colonial India and the International Trade in Currency Media In: Richards, J. F. (ed.) *The Imperial Monetary System of Mughal India*. New Delhi, 232-373.
- Perlin, F. (1993) *"The Invisible City": Monetary, Administrative and Popular Infrastructures in Asia and Europe 1500-1900*. Aldershot.
- Perlin, F. (1994) *Unbroken Landscape: Commodity, Category, Sign and Identity: Their Production as Myth and Knowledge from 1500*. Aldershot.
- Piot, C. D. (1991) Of Persons and Things: Some Reflections on African Spheres of Exchange. *Man* 26 (3), 405-424.
- Prakash, O. (1998) *European Commercial Enterprise in Pre-colonial India*. Cambridge.
- Quigley, D. (1993) *The Interpretation of Caste*. Oxford.
- Raheja, G. G. (1988) *The Poison in the Gift: Ritual, Prestation and the Dominant Caste in a North Indian Village*. Chicago.
- Ray, R. K. (2003) *The Felt Community: Commonalty and Mentality before the Emergence of Indian Nationalism*. New Delhi.
- Samantaray, N. (1975) *Sakhāhina Pañcasakhā (Panchasakha [Five Comrades] without Comradeship)*. Bhubaneswar.
- Samantaray, N. (1982) *Oḍisāra Dharma Dhārāre Pancasakhā Parikalpanā (Panchasakha Imagination in Orissan Religious Practice)*. Bhubaneswar.
- Schaar, J. H. (1981) *Legitimacy in the Modern State*. New Brunswick & London.
- Shotter, J. (1993) *Cultural Politics of Everyday Life: Social Constructionism, Rhetoric and Knowing of the Third Kind*. Toronto.
- Srinivas, M. N. (1952) *Religion and Society among the Coorgs of South India*. Oxford.
- Stein, B. (1980) *Peasant, State and Society in Medieval South India*. New Delhi.
- Stein, B. (1985) State Formation and Economy Reconsidered. *Modern Asian Studies* 14 (3), 387-413.
- Stein, B. (1989) Eighteenth Century India: Another View. *Studies in History*(n.s.) 5 (1), 1-26.
- Subrahmanyam, S. (ed.) (1990) *Merchants, Markets and the State in Early Modern India* New Delhi Oxford University Press.

- Subrahmanyam, S. (2001) *Penumbral Visions: Making Polities in Early Modern South India*. Ann Arbor.
- Tanabe, A. (1999) Kingship, Community and Commerce in Late Pre-colonial Khurda. In: Karashima, N. (ed.) *Kingship in Indian History*. New Delhi, 195–236.
- Tanabe, A. (2003) The Sacrificer State and Sacrificial Community: Kingship in Early Modern Khurda, Orissa Seen Through a Local Ritual. In: Berkemer, G. and Frenz, M. (eds) *Sharing Sovereignty: The Little Kingdom in South Asia*. Berlin, 115–135.
- Tanabe, A. (2005) The System of Entitlements in Eighteenth-century Khurda, Orissa: Reconsideration of 'Caste' and 'Community' in Late Pre-colonial India. *South Asia* 28 (3), 345–385.
- Tanabe, A. (2006) Early Modernity and Colonial Transformation: Rethinking the Role of the King in Eighteenth and Nineteenth Century Orissa. In: Kimura, M. and Tanabe, A. (eds) *The State in India: Past and Present*. New Delhi, 202–228.
- Tanabe, A. (forthcoming) King, Goddesses and Jagannath: Regional Patriotism and Sub-regional and Local Identities in Early Modern Orissa. In: Berkemer, G. and Kulke, H. (eds) *Centres Out There? Facets of Subregional Identities in Orissa, India (provisional title)*. New Delhi.
- Tripati, G. & Kulke, H. (1987) *Katakarājavamśāvalī: A Traditional History of Orissa*. Allahabad.
- Washbrook, D. (1981) Law, State and Agrarian Society in Colonial India. *Modern Asian Studies* 15 (3), 649–721.
- Washbrook, D. (1988) Progress and Problems: South Asian Economic and Social History c. 1720–1860. *Modern Asian Studies* 22 (1), 57–96.
- Washbrook, D. (1990) South Asia, the World System and World Capitalism. *Journal of Asian Studies* 29 (3), 479–508.
- Wink, A. (1986) *Land and Sovereignty in India: Agrarian Society and Politics under the Eighteenth-Century Maratha Svarājya*. Cambridge.
- 応地利明 (1977) インド村落研究ノート —— とくに19世紀における孤立・小宇宙的村落観の形成とその崩壊をめぐって —— 『人文地理』29 (5), 33–69.
- 小倉泰・横地優子訳注 (2000) 『ヒンドゥー教の聖典二篇』平凡社。
- 黒田明伸 (2003) 『貨幣システムの世界史：〈非対称性〉をよむ』岩波書店。
- 小谷汪之 (1989) 『インドの中世社会 —— 村・カースト・領主』岩波書店。
- 小谷汪之 (2007) 近世西インドにおける在地社会と国家 小谷汪之(編)『世界歴史体系 南アジア史 2 中世・近世』山川出版社, 230–266。
- 小谷汪之(編) (2007) 『世界歴史体系 南アジア史 2 中世・近世』山川出版社。
- 小谷汪之・水島 司・三田昌彦 (2007) 序章 中世の世界から近世・近代へ 小谷汪之(編)『南アジア史 2 中世・近世』山川出版社, 3–24。

- 田辺明生 (1993) 力の変容 —— インド・オリッサのラモションディ女神祭祀 —— 『民族學研究』 58 (2), 170-197.
- 田辺明生 (1997) 共生のしくみ —— クルダ王国マニトリ城塞の事例から —— 木村靖二・上田信 (編) 『人と人の地域史』 (『地域の世界史』 10) 山川出版社, 278-330.
- 田辺明生 (2006) デモクラシーと生モラル政治 —— 中間集団の現代的可能性に関する一考察 —— 『文化人類学』 71 (1), 94-118.
- 中里成章 (1999) インドの植民地化問題・再考 樺山紘一(編) 『アジアとヨーロッパ (1900年代～20年代)』 (岩波講座世界歴史 23) 岩波書店, 155-179.
- 水島 司 (1990) 『18-20世紀南インド在地社会の研究』 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- 水島 司 (2008) 『前近代南インドの社会構造と社会空間』 東京大学出版会.

(京都大学人文科学研究所)